

愛知県西部の人口指標と居住環境意識に関する研究

名古屋工業大学 学生会員 ○原 史弥
 西松建設株式会社 中川 渉二
 名古屋工業大学 正会員 藤田 素弘

1. はじめに

わが国の人口の減少幅が年々増加していることは各種調査により明らかであるが、その中で愛知県も2017年には自然増減数がマイナスになり、2020年にはついに人口減少に転じている。さて、人の居住選択は既往研究からも住みやすさや雰囲気などの地域の質的資源が大きく影響を与えているが、人口減少に悩む市町村にとっては、住民が居住選択をする際どのようなことを重要視しているのかなどに目を向ける必要がある。本研究では愛知県の人口指標変化や居住環境意識の関係を探るべく、人口指標の他県との比較や、愛知県に住む子育て世代を対象としたアンケート調査による街の満足度指標の分析を行い、人口増減に関する知見を得ることを本研究の目的とする。

2. 愛知県と他県の人口動態分析

ここでは愛知県、静岡県について人口動態調査結果年報や国勢調査をもとにした人口データと厚生労働省の合計特殊出生率（以下、出生率）のデータをもとに分析を行った。愛知県の分析を図-1に示し、これより人口増加率は、名古屋市中区などの都心やその近辺、名古屋・豊橋間に位置する地域において高い値を示したが、都心から離れた東栄町などは低い値を示した。また、出生率では大府市などの名古屋市周辺の地域では高い値を示したが、名古屋市は低い値を示した。静岡県の分析を図-2に示すが、浜松市浜北区などの愛知県豊橋市に近い地域で人口増加率は高くなる傾向にあり、伊豆半島に位置する地域で低い傾向がみられた。出生率では神奈川県にアクセスしやすい地域が高い値を示し、市内都心部においてやや低くなる傾向がみられた。

全体としては、人口増加率は都心近郊、平野部で高い傾向を示し、出生率では、人口増加率に対して、都心部でやや低く、都心近郊で高くなる傾向は見られるが、各地に転々と存在し、地理的な条件での強い傾向

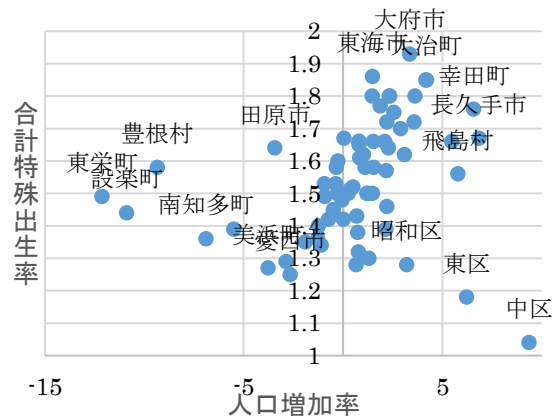


図-1 愛知県の人口指標の関係

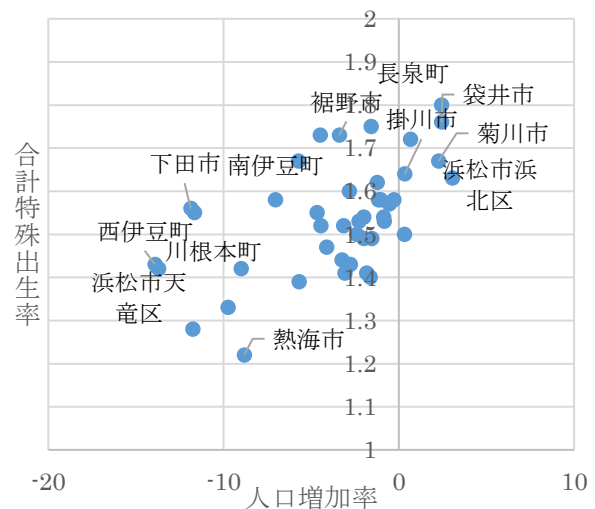


図-2 静岡県の人口指標の関係

は見られなかった。

3. アンケート調査による分析

篠原らが行ったアンケート調査のデータを用いて、人口増加率・出生率の観点から相関分析を行った。ここで用いたのはスピアマンの順位相関係数である。これを用いてアンケート調査で得られた満足度指標より人口増加率・出生率との相関分析を行った。得られた相関係数を表-1に示す。表-1より、人口増加率では

「大型商業施設」や「公園安全性」などが上位になり、生活を便利にする生活利便性が求められることが分かる。出生率では、「自然豊かさ」や「ご近所付き合いの程度」、などが並び、自然環境を含めた子育て環境が求められていることが分かる。同様に重要度指標でも分析を行った。これにより人口増加率では「公共交通利便性」や「地域の評判」などが上位となり、生活の利便性に加えて、評判等の都市イメージも重要であると分かり、出生率では満足度と同様に、自然環境を含めた子育て環境を必要であると分かった。

さらに地域別の人口増加率と満足度指標と相関分析を行ったところ、都心では、「大型商業施設」や「床面積」などの生活利便が重要であることが分かり、都心周辺の地域での人口増加率と満足度指標との相関分析では、生活を快適にする項目と自然環境を含めた子育て環境の項目が共に高い値を示した。

4. 共分散構造分析を用いた検定

共分散構造分析とは、直接観測できない潜在変数を導入し観測変数との間の因果関係を同定することにより社会現象や自然現象を理解するための統計アプローチである。今回の分析ではIBN SPSS Amosを用いた。作成したものを図-3に示す。使用する観測変数はアンケート項目の満足度（1～5段階評価）を使用し、潜在変数は、「都市イメージ」、「子育て環境」、「生活基盤」、「生活利便」、「安全基盤」の5つを設定した。「生活基盤」変数に「生活利便」、「安全基盤」という2つの潜在変数に分けたのは、「普段買い物施設」や「世帯主職場」などでは生活を快適にする項目であり、「地域の治安」や「立地の安全性」などでは、生命や安心に関わる項目であるので、性質は異なるため分けることにした。パス図は標準化したもので、いずれも統計的に有意であった。本モデルの適合度指数ではGFI, AGFIを用い、GFIは0.953、AGFIは0.928であり、統計的に有意であるためこのモデルは採用できるといえる。「生活基盤」は「都市イメージ」に0.91と強い正のパスがみられることから「都市イメージ」は「生活基盤」に強い影響を与えるといえる。また、「子育て環境」との相関係数では0.66と相関がみられることから「生活基盤」に満足している人は子育て環境にも満足しているといえる。また、「安全基盤」や「歩道・公園の防犯性」や「子供が利

表-1 各項目と人口指標との分析

項目	人口増加率 (H27-H31)	項目	合計特殊出生率
大型商業施設	0.934 ***	自然豊かさ	0.774 ***
子どもの公園移動性	0.754 ***	ご近所付き合いの程度	0.7398 ***
総合評価	0.741 ***	子育て世代の多さ	0.691 ***
公園安全性	0.627 **	街の景観	0.645 **
地域の評判	0.626 **	文化的環境	0.645 **
道のわかりやすさ	0.600 **	住居騒音	0.609 **
子どもが利用する歩道の安全性	0.574 **	地域の評判	0.587 **
文化的環境	0.569 **	立地安全性	0.579 **
世帯主職場	0.568 **	地域の治安	0.557 **
立地安全性	0.565 **	床面積	0.550 **
自治会や地区の活動	0.528 *	行政支援の充実度	0.496 *
子育て世代の多さ	0.508 *	学校の教育レベル	0.446
行政支援の充実度	0.506 *	大型商業施設	0.321
地域の治安	0.463 *	道のわかりやすさ	0.316

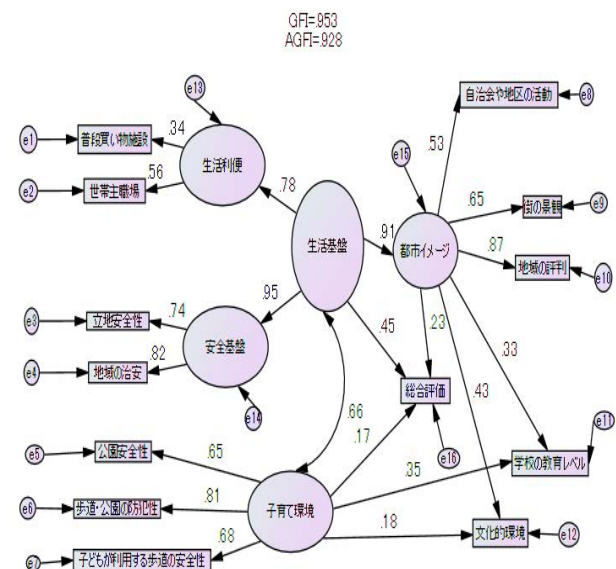


図-3 共分散構造分析モデル

用する歩道の安全性」などに強い正のパスがみられることから、安心安全な街が求められることが分かった。

5. まとめ

本研究ではまず、人口増加率、出生率の観点から愛知県と静岡県の2県での分析を行い、人口増加率は都心や都心近郊、平野部などで高い値となるが、都心部では人口増加率が高くて出生率はやや低くなる傾向があった。次に、アンケート調査での満足度・重要度指標での分析では人口増加率では生活や交通の利便性が必要であり、出生率では、自然の豊かさなど子育て環境や教育の充実が必要であると分かった。今後は地域ごとの特徴や特性に合わせた、より個別的な分析が必要である。